原著論文

スポーツにおける人間理解の可能性¹

—四つの視点とイーザム (Eassom, S.) 論文からの示唆—

深 澤 浩 洋 (日本体育大学)²

関 根 正 美 (岡山大学)³

石 垣 健 二 (筑波大学)⁴

Abstract

What are human beings in the context of sport? The aim of this paper is to inquire the possibility of the understanding on human beings through sport, proposing the perspectives and the advantages of the current philosophical literature on sport. First, we have classified the modes of the understanding on human beings in four, i.e. human beings (1) as the being objective, (2) as the being selfhood, (3) as the being other, and (4) as a whole. (1) lies outside the scope of this paper since the nature science is dealing with it. The matters of the other three are (2) the understanding on the authentic self, (3) ethical issue of the serious relationship to others, and (4) the limit of the essentialistic view of human beings. Second, we have examined them in detail based on Eassom's discussion on the philosophy of sport. Rorty, who was mentioned in it, has the negative opinion on human nature, that is antifoundationalism. He provides a model of communities in which people themselves intend to the solidarity with the awareness and sensitivity to radical contingency. This model gives those three modes of the understanding on human beings, the suggestions are as follows; (1) The individuals build themselves by making their own experiences of sport into their own narratives which consist of the terms used in a community. (2) The conversation induced by the narratives has a possibility of the mutual understanding on each community. (3) The way from the awareness of the contingency of sport to the solidarity would provoke the intention to wholeness of human beings.

Key Words : the understanding on human beings, self, other, community, solidarity, narrative

キーワード : 人間理解, 自己, 他者, 共同体, 連帯, 物語

¹ The possibility of the understanding on human beings in sport: Four perspectives and suggestions of the discussion by Eassom, S.

² Koyo FUKASAWA, Faculty of Physical Education, Nippon Sport Science University, 7-1-1, Fukazawa, Setagaya, Tokyo 158-8508

³ Masami SEKINE, Faculty of Education, Okayama University, 3-1-1, Tsushimanaka, Okayama 700-8530

⁴ Kenji ISHIGAKI, Institute of Sport Sciences, University of Tsukuba, 1-1-1, Tennodai, Tsukuba, 305-8574

1. スポーツにおける人間理解の問題

体育という教育行為もスポーツという文化的行為も人間によって人間のために行われる行為である。体育やスポーツは人間の問題を離れてはそれらを行うことも研究対象として扱うこともできないと言えるだろう。我が国の戦後の体育においては、戦前の反省からどのような人間を創るのかといった体育における人間形成の問題が問われるようになった。体育における人間存在は、国家の手段としてのみ把握される一義的な存在から個人の自由を基盤とした多義的な存在として把握されるようになったのである¹⁾。

一方、スポーツと人間存在の関わりはどうか。1986年に日本体育学会体育原理専門分科会から刊行された『スポーツの概念』の中で、当時の課題について「スポーツの真の大衆化を推進するためにもスポーツとは何かをめぐり理論の確立が求められるのである²⁾」ということが言われている。だが、スポーツの真の大衆化にとどまらず、スポーツの現代的位相は教育という側面に限らず様々なアプローチの可能性を持っている。現代という20世紀末を迎えて、「人間がますます匿名化され、また人間生活の意味喪失が進行しつつある」ということは、現実の一面として認めざるをえない³⁾という状況の中でスポーツを問うことの意味は、それが人間存在の孤立化の状況を克服し、人間相互を結びつける可能性を見いだすことにあると言えるだろう。「スポーツとは何か」ということを日本体育学会体育原理専門分科会が正面から問題にしてから10数年が経過した今、われわれはスポーツから人間について考察する地平に立っている。

以上のような問題意識のもと、本稿はスポーツという枠組みからの人間理解の可能性を探ることを目的とする。本稿における考察の手続きは次のようになされる。まず人間理解ということの観点を明確にするために人間理解の様態を類型化することで、スポーツからの人間理解の

射程を明らかにし、次にスポーツ哲学における最近の議論の中からイーザム (Eassom, S.) の論文を取り上げ、スポーツという枠組みからの人間理解の可能性を現代という状況と照らし合わせながら考察する。

2. 人間理解の様態

2.1 人間理解の類型

われわれが人間理解ということで人間を問題にするときに対象となる「人間」は具体的にどのような存在と考えられるのだろうか。自己も人間であれば他者も人間である。また全体としての人間を指す場合もある。当然のことながら、人間理解の意味は多義的になる。そこで、議論の明確化を図るために、さしあたって人間理解の様態を四つのレベルに分類しておきたい。それは以下のように分類される⁴⁾。

① 客観的存在としての人間に関する理解

② 自己存在としての人間に関する理解、自己知としての問い

③ 他者としての人間に関する理解、他者論としての問い

④ 人間存在の全体に関する理解、哲学的人間学としての問い

である。①の客観的存在としての人間に関する理解ということに関しては、これまで自然科学の領域によって人間理解が試みられてきた。人間の行動や身体能力を数値化によって把握しようとする科学の人間理解は、ある部分で人間に関する共通であり且つ確実な認識をわれわれに与えてくれる。しかし人間理解という問題の本質は、それが哲学的問いである限りにおいて、このような科学的人間理解を突破したところにあるともいえる。体育哲学ならびにスポーツ哲学の領域が関わりを持つのは②③④の問いである。

それぞれについて検討してみたい。

2.1.1 スポーツにおける自己存在としての人間に関する理解

自己存在としての人間に関する理解とは、いうまでもなく自己に関する認識のことであり、「自覚」のことであると考えらる。上田は次のように言う。「自己は自己という自覚としての自己である。むしろ端的に自覚が自己である。」⁵⁾「自己とは、自己が自己になるということ、しかもその『自己になる』は単なる生成、ないし連続的実現ではなく、『真の自己になる』、即ち非本来的な在り方から本来的な在り方への転換を含んで始めて真の自己になるということである。」⁶⁾このように上田によれば、自己存在としての人間に関する理解は、自覚による本来的な自己の転換を含んでいる。

さて、スポーツにおける自己理解は、どのようなスポーツ活動の中で得られるのだろうか。一つは最高度の達成を目指し、勝利を追求する競技スポーツで得られると言えるだろう。確かにそのような活動の中で、人間は達成したことによって自己が何であるかを知るであろう。しかし、そこには自己理解において重要な自覚による本来的な自己の転換を促す契機が希薄なのではないだろうか。自覚によって本来的な自己を知ることは、目標へ一直線に駆け上がる行為ではなく、自己を常に反省する行為から生まれる。

ここで、自覚によって本来の自己を知るための具体的、実践的なスポーツ活動の形態として、競技スポーツとは異なる生涯スポーツ活動が挙げられるであろう。生涯スポーツについては、かなり多くの記述が雑誌や単行本の中でなされているが、その要点をまとめるならば、「生涯スポーツとは、人々がそれぞれのライフステージにおける生活の要求に根ざして、日々の生活の中で容易に実践でき、しかも人々の健康で文化的な生活実現に裨益するようなスポーツの総称」であり、その意味は、「すべての人が運動の楽しみや健康を求めてみずから参加する」ところにある、とまとめられる⁷⁾。生涯ス

ポーツで重要な点は、生涯を通じて異なるライフステージにおいてスポーツを実践し、そこで得られたことを自分の生活を豊かにするために生かしてゆくことにある。そこで問題になるのが、自分の状況に合ったスポーツ活動についての認識である。特に若い頃に競技経験のあるスポーツをするときは、往々にして昔のイメージで身体を動かして怪我をすることがある。自分の衰えというものはできれば認めたくないだろうし、衰えを素直に認めるという態度はそう簡単に取れるものではない。

ハンス・レンク (Lenk, H.) は言う。「人間というものは野心家であって、他人と速さを比べ、自己に対し最高度の要求をする。個々人は分別のある節度と調和、十分に吟味されたトレーニング処方、絶え間なく自己観察を続けることなどを常に理解しなければならない。」⁸⁾自己であることの難しさ、本来の自己のあり方を自覚することの難しさは、どのようなタイプのスポーツを行っても認められるであろうけれども、生涯に渡って本来の自己を自覚し、自己を知ることが要求されるという点で、生涯スポーツにおける自己理解が追求されるべきであると考ええる。

さらにこのことは体育の問題として展開することもまた期待されるであろう。たとえば自分がなすべきこと、やっていいことと悪いことの判断や、身体感覚を通して自己を知ることが体育はさまざまな教材を通じて教えてゆくべきではないだろうか。

以上のようにスポーツの中には明らかに自己理解の契機が存在していると言える。体育哲学ならびにスポーツ哲学がここから展開すべきテーマとしては自己理解の構造解明が挙げられるだろう。それは、達成感などの自己意識とからだ気づきとの関連や自己理解の契機といったテーマで語られるであろう。

2.1.2 スポーツにおける他者としての人間に関する理解

他者理解あるいは他者認識という形での人間理解は、現代思想の中で重要なテーマの一つである。身体をキーワードにした他者問題を扱った思想として代表的なものに、メルロ＝ポンティ（Merleau-Ponty, M.）の思想があるが、スポーツ哲学における人間理解に関する探求はその限界を指摘することから始めなければならないであろう。

メルロ＝ポンティの他者理解は、知覚の次元で経験される共通世界を手引きとして他者との関係を考えている。それは知覚のレベルで他者と無差別な共通の関係を有することを意味する。しかもそれは幼児の知覚経験に依拠しているのであって、自他意識の芽生える大人の人間関係には移しかえることのできない世界である。

静的な身体経験の世界をさらに越えて、意識を伴った身体運動としてのスポーツにおける経験に即してこの問題を考えると、異なることが言えるであろう。石垣によって明らかにされつつある運動学習における知覚構造のネットワークに注目した他者理解の可能性⁹⁾が、メルロ＝ポンティの知覚による自他の無差別性という他者問題の限界を突破しうるかもしれない。しかしここではさらに踏み込んで、他者の他者性が問題になるレベルでスポーツにおける他者理解を考えてみたい。

一般に、スポーツにまじめに関わろうとすればするほど相手との関係は融和的なものから離れてゆかざるを得ない。日常の場面における人格への尊敬とスポーツ場面での自他関係は別である。スポーツにおいては感情レベルで他者つまり相手を倒そうとする感情が、——それはもちろんルールに規制された範囲であるけれども——が生じてくる場面があるし、自分の技術体系や戦術をわざと知られないようにすることも必要とされる。実際のスポーツ活動では他者理解を不可能にする場合が必然的に起こるし、他

者理解の遮断が意識的に行われるのである。それを乗り越えるには、知覚経験の世界の無差別性や同一化を越えた他者理解の世界を考える必要があるのではないだろうか。

要するに、スポーツにおける他者との緊張関係は容易に解消できるものではないのであって、スポーツにおける他者は原理的に理解不可能な絶対的他者と言えるのである。他者理解に関する最大の難点は、結局自己を通してしか他者を理解できない点にある。常に自己の主観が他者を構成しているのである。自他の問題を倫理として考えねばならない理由がここにある。他者理解に関してスポーツ行為をテキストにして追求されるべきは、むしろ倫理であると考えられる。逆に言えばスポーツ倫理は他者問題にアプローチすることでさらなる意義を獲得できるのではないだろうか。

2.1.3 スポーツにおける全体としての人間に関する理解

全体としての人間の本質に関する問題は、現代において哲学的人間学と呼ばれている。哲学的人間学は、人間学である限りにおいて Anthropology であるが、それは自然人類学とも文化人類学とも異なっている。哲学的人間学は、自然人類学や文化人類学などのように科学的知の集積によって客観的に人間を解明しようとするのではない。元来人間は、自分自身のありかたや生き方に関心を持ち、自分のあるべきあり方や生き方へと生成してゆく存在である。

このような哲学的人間学としての人間理解に関して、レンクは「達成する存在」という人間理解を示した。レンクは言う。「人間は意識的に目標を志向し、合目的に行為することが可能であり、相対的に自由であり、活動的な行為によって自己実現が可能な存在である」¹⁰⁾。また、こうも言っている。人間は、「型という方法によって、型を用いることと、自らを形作るという二重の意味において、自分自身の理解へ到達し、自分があるところのもの、あるいはあ

るべきところのものに自らを作り上げる。」¹¹⁾このような人間像をレンクはトップレベルを目指す自らの競技経験から作り上げた。レンクの「達成する存在」は、決して単独でそのみで人間存在全体の本質を示す人間理解ではない。そのことについては、レンク自らが、ホモ・ファベルやホモ・クレアトルなどのこれまでの人間像と結合するかたちでの人間理解であることを語っている¹²⁾。そうすると、やはり、レンクの人間理解には、それでもって人間存在全体の本質を示すということには限界があると言える¹³⁾。

しかしながら、哲学的人間学としての人間理解は絶対的な終局点があるわけではなく、社会や時代の状況をふまえながら、その都度、人間のあり方や生き方に指針を与える人間理解が示されることは必要であろう。そういった意味で、スポーツという人間の行為、文化から、レンクの「達成する人間」に続くさらなる人間理解を示すことは意義のあることだと考える。

2.2 スポーツにおける人間理解の限界と可能性

「人間理解」からスポーツ哲学はどのようなテーマを構成することが可能であるのか、との問いに立ち返ってみると次のようなことが言える。

一つは、スポーツにおける自己理解の契機ならびに構造を明らかにすることである。楽しさやフロー体験といった感覚と自己理解という反省的意識との関係あるいは結びつきを明らかにすることも必要であろう。それらを明らかにするというスポーツ哲学研究成果を基礎にして、スポーツ教育とりわけ生涯スポーツ教育の推進プログラムは準備されなければならないと考える。統計や数値で明らかにされない領域に踏み込むことが重要である。これまでスポーツが楽しみを通じて豊かな生活に役立つこと、スポーツが自己実現や自己理解をもたらすことがいろいろなところで指摘されてきているが、そ

れらの関連性や構造を明らかにすることが必要である。

次に、他者理解についてであるが、これについてはスポーツ倫理としてアプローチすることの必要性が指摘できるであろう。しかしながら、他者理解に関しては絶対的な他者理解などというものは存在しない。また、他者理解に関しては自己理解とは異なり、それがそもそも可能なのかといった他者理解成立の前提をも疑う必要があるだろう。全体としての人間理解である哲学的人間学についても同じことが言える。

最後に全体としての人間理解である哲学的人間学については非常に大きなテーマであるが故にここでその詳細を議論することは不可能であるが、スポーツという人間に固有の活動から人間のあり方を探ってゆくことは意義のある研究テーマであると言えるであろう。

以上の考察のように、スポーツ活動の場から立ち上がる人間理解に関して、他者理解と哲学的人間学の構築を全面的に肯定するのは困難である。それらには限界がある。しかしながら、限界を限界ととらえたうえでスポーツなればこそ可能となる人間理解の領野もまた存在する。次節において、人間理解とりわけ他者理解に関して人間の心情面に依拠しつつ人類普遍の要素を取り出す方向とは異なる観点から人間理解の可能性にアプローチしてみたい。

3. イーザム論文にみる人間理解の方向性

3.1 普遍主義に対する疑問

スポーツは現在地球上の至る所で行われており、文化の相違を越えて国際大会が催されるまでに至っている。初対面の者同士でもスポーツ実践は可能であり、異なる文化、言語を有する者の間で一つの実践を成立させられるところにスポーツの一つの特徴があるといえるだろう。オリンピックが「平和の祭典」と称されたり、国際理解に対する貢献を期待する声が聞かれたりする今日、我々は、スポーツにグローバルイ

ゼーションの一端をみることができる。また、そうした状況の中で、スポーツからアマチュアリズムやスポーツマンシップといった価値や道徳性を導こうという議論¹⁴⁾もゆらぎつつあるといえる。というのも、「長年、スポーツにおいて普遍的な価値を持つと思われてきたアマチュアリズムなる美德にしても、スポーツを生み出したイギリスの特権的なジェントルマン固有のイデオロギーであり、感情であった」¹⁵⁾からである。

今日オリンピックのような国際大会が催されるようになったとはいえ、そこに何らかの人類普遍の要素を認め、これを根拠に人間理解の可能性を語ることは果たして妥当か。問題は、「グローバルな実践」¹⁶⁾という事実を根拠に何らかの人間共通の本性といったものを指定することが許されるかということである。ただし、グローバルな実践としてのスポーツといっても、実際には、「我々全てが隣人であるようなグローバルファミリー、一つの種 (one tribe)、ユニバーサルヴィレッジといったイメージは、比較的新しい」¹⁷⁾ものだし、また、国際オリンピック委員会の委員の構成¹⁸⁾に見られるような「男性偏重」などからも、スポーツが必ずしも人種や性差を超えて世界中のあらゆる人々に開かれているとはいえない現実がある。

完全なグローバルイゼーションには至っていない現実ゆえ、普遍性を求める議論を放棄せざるを得ないのか、それとも普遍性に至る道は可能なのか。この辺りのことについて、最近のスポーツ哲学では、イーザム (Eassom, S.)¹⁹⁾によるローティ (Rorty, R.) とシンガー (Singer, P.) を手がかりとしたスポーツ論がある。彼の議論には、人間相互の理解、もしくは他者理解という視点が盛り込まれており、これを考察することにより、スポーツを通して導かれる人間理解の一端に触れることができると考え、本節ではスポーツ哲学における今日的な議論に注目して見ることにする。

スポーツがグローバルな実践とみなされるよ

うになってきた今日、そこに何らかの人間的本性を認めたくなるのは自然なことかもしれない。だが、イーザムが手がかりとしたローティとシンガーは、はじめから普遍性を前提とするような論じ方にはなっていない。イーザムは、この二人の間に論調の相違がみられるものの、両者が同じ主題を扱っていると考えている²⁰⁾。

3.2 シンガーの「拡大せる輪」

その主題とは、「我々 (we)」の認識である。シンガーは西洋の伝統的な個人主義や自己に対する執着に関しては批判的であり、自らに対する関心から、共同体に対する関心や世界に対する関心へとその輪を広げるべきだとする考えをもっている。これは同時に、「我々」という認識をそういったものへと拡大してゆくことを含意している。その際、我々という認識が可能なのは、その背景に我々が何らかの共通の本性や本質を共有しているからであるとシンガーは考える。この本性を彼は苦痛を感じる能力に求めている。ある存在が苦痛を感じる以上、それを配慮しないわけにはゆかず、道德の基本原則である平等の原理の根拠がこの点に求められるという²¹⁾。

この議論の流れでゆくと、「我々」という認識の対象は、人間以外の動物にまで広がることになる (実際シンガーは、この基本原理をもとに動物の権利を主張する)。人間理解という目的に照らしてみると、対象の広がりにおいて問題が残るだろう。また、本性や本質的なものの設定は、その設定如何で、人間以外のものへの適用を許す場合があることに気づくだろう。

3.3 ローティの「エスノセントリズム」——連帯の出発点

本性の共有を前提とするシンガーに対し、ローティは、反基礎づけ主義 (antifoundationalism) の立場に立ち、人間固有の本性を共有することが我々感覚の基礎にあるとは考えていない。彼は、そのような本性や普遍性を背景にす

るのではなく、ある個人が偶然に存在した当該社会において特定の価値的立場にコミットしつつも、自らの信念が相対化される可能性があることを知るべきだとする見解を持っている。このような立場をローティはエスノセントリズム（自文化中心主義）と呼んでいるが、それは、個人が所与の文化的コンテクストと切り離しがたく結びついていることと、自らの存在が根本的に偶然的なものであることを自覚し受け入れようとする態度を意味している。また、その社会の中で通用する正当化や記述方法を離れては真理や合理性について語ることができないという見方をする。この点からすると、エスノセントリズムは、相対主義に近いものとみられるかもしれない。ある意味では消極的な立場ではある。がしかし、それは必ずしも閉鎖的なのではなく、他の文化の信念と自らが属する文化の信念とを織り合わせようとの態度が常にとられていなければならない。つまり、異なる文化をもつ人間の存在を認めつつも相互理解の可能性は開かれていると考えるのがエスノセントリズムであり、それは相互理解を深める運動の出発点に位置づけるのである。ただし、これを出発点として我々感覚の拡大や全体性の方向に向かうものの、その先の「どこかに超越的な規範や絶対的真理が厳然と存するという、客観主義的な見方を、この立場は採らない」²²⁾。そうではなく、強制といったものなどに依ることなく合意を得てゆくことを支持する立場である。それは、「別の信念を持っている人との自由な開かれた戦いを通して、強制によらない合意が最終的に得られるような信念を獲得したい」²³⁾という願望に動機づけられている。そこで目指されるのは、「強制によらない合意」と「容認しうる見解の相違」との適度な混交であるというが、その度合いを決めるのは試行錯誤によるのだという²⁴⁾。なぜなら、共同的な探究の基盤は、認識論的基盤や形而上学的基盤ではなく、ただ倫理的な基盤だけだからである。

こうしてみると、ローティのエスノセントリ

ズムは、他の文化の価値観を肯定することも否定することも諦めたかのような孤立主義的立場とは無縁のものであることが分かる。そして、価値観や道徳の全面的な共有という理想を一度捨て去り、共有できる部分を探る営みを継続・繰り返すことで理解を深めてゆくしかないとをローティは連帯（solidarity）という言葉で表現している。このように捉えられるローティのエスノセントリズムは、家族から共同体、国家、世界全体、さらには動物に至るまで、利他主義の輪を拡大せんとするシンガーとは立場を異にしている。

3.4 共同体

さて、こうした偶然的で当該の我々意識に支えられた共同体の違いを越えて、現在ではスポーツが至る所で、また異なる共同体間で実践されている。現実には、人々が実践するのはスポーツ一般ではなく、テニスや野球といった具体的な個々の種目である。そしてこれらを実践する人々が集まって実践者の共同体を作る。スポーツの実践者が道徳的責任を負うのは、私的、個別的なスポーツ実践においてではなく、スポーツの共同体に対してである。この、共同体に対する道徳的な責任は、必ずしも、人類普遍の道徳性から導かれるものでもなければ、それを基礎づけるものでもない。ローティ的な自文化中心主義が示唆するのは、一つの共同体に対する忠誠が道徳性を規定するのであって、より高次の基礎的な（普遍的な）ものから導かれるものではないということである。

また、プレイヤーとしての個人は、孤立的な自己から導かれるわけではなく、いわば共同体内存在としてはじめて意味を持つ。西洋の伝統的個人主義も実は共同体の中で初めて意味があるのであって、ローティはそのことを気づかせてくれる。そして、ある者を「我々」の一人として、つまり共同体の一員として受け入れるところに道徳性の根拠が見出される。ある者の行為に対して嫌悪感を抱くとすれば、それは、ロ

ローティによれば、彼に対する感情ではなく、彼を我々の一員とみなした結果に基づいているということである。シンガーが利他主義を動物にまで拡張しようとするのとは対照的に、ローティは、我々の内と外とに一線を引こうとする。つまり、共同体における「我々」意識には、その内と外との区別が伴うからこそ共同体も存立可能だと考えるのである。これを人類全般やそれ以外のものにまで広げてしまうことは、内と外との区別を解消することにもなるからである。この一線を画するものとしてローティは、対話を挙げている。対話は、他人と話そうとしたり、我々が他人に対して及ぼした行為を評価しようとする意志を必要とする²⁵⁾。対話の可能性が「我々」の存立を可能にしているといえる。シンガーとローティを人間理解との関連からみると、前者の立場は人間理解の対象である人間そのものを曖昧にしまう可能性をはらんでいるのに対し、後者のそれは対話可能な人間の在り方に人間理解に対する示唆が期待できるのではなかろうか。

3.5 連帯の可能性としての詩的メタファー

ローティにとっては、「社会的に許容され、文化的に関与する言葉で言われる『人類の対話』を継続する我々の唯一のチャンスを残しているのが、自由、アイロニー、偶然性を受け入れる……『連帯』の形式」²⁶⁾である。連帯を押し進める際には、合理的な理由付けや知識、あるいは真理などに訴えるのではなく、詩的メタファーが重要な役割を果たすことをイーザムはローティに依拠しつつ述べている²⁷⁾。「道徳的言説とはむしろ、我々が互いに競合しあう選択肢のどちらに託すかについて想像力を働かすことだ、というローティの見解を強調するのが詩的メタファーである。」²⁸⁾我々を結びつけ、他者を我々と同じように感じさせるような影響を与えるのは、合理性や知識よりもむしろ詩的な想像力だとローティは考えるのである。それは自由や偶然性を許容し、社会的に受け入れられる

ことで人類の会話を促す契機となりうる。こうして、詩的メタファーは、共同体間を結びつける鍵と考えることができるだろう。

また、一つの共同体に受け入れられている物語の中で個人の位置づけや意味づけがなされてゆく。スポーツに限ったわけではないが、芸術なども含め、そこでは、それまでの伝統や先駆者の乗り越えを図る偉大なる創造者がいて、一つの物語を形成する。スポーツでは特に記録との関連で語られるのだが、記録の更新によって自己のみならずその世界が再生されるのである。この例としてイーザムが挙げているのは、アルジェリアの女性ランナーであるブルメルカである²⁹⁾。彼女は、オリンピックでの勝利により、イスラム女性の英雄として迎えられた一方、多くの男性の前で脚を晒したとしてイスラム原理主義者からスキャンダラスな行為であるとの非難を受けた。ブルメルカをめぐる物語が如何に構築されるか、イーザムはそれ如何によってそこに対話の可能性が開かれていると考え、先に述べたローティの連帯への道をスポーツに適用しようと試みる。それは、「特に、スポーツそれ自体がまさしく一種の『対話 conversation』である」との考えを追求することを約束しているように思われる。その対話は、共同体を拡大し、『連帯』の感覚を強めるために『我々』という感覚の広がりをもたせようとする³⁰⁾のである。このブルメルカをめぐる物語が提示するのは、生活様式の違いを反省的に考えることで我々の生活の意義を道徳的に拡大させる可能性や、人間本性というような抽象的・形而上学的な概念に依拠することなく、平和な生活などについて具体的に考えさせる点などである。スポーツの国際試合で活躍する選手がもたらす功績が、異なる共同体間で相互の立場について想像力を働かせるきっかけとなれば、異文化間での対話の可能性、すなわち連帯の可能性も開けてくるといえるだろう。

そして、人間の相互理解に関していえば、国家的、地域的、宗教的共同体間の理解の他に、

こうした共同体と、スポーツを通して組織される共同体との相互理解、対話といった問題圏が今後さらに浮かび上がってくることが予測される。

4. 考察ならびにまとめ

前節では、スポーツ哲学関連の文献を取り上げ、今日的な議論を眺めてみた。これを本稿の前半で掲げた①～④のうち、②～④についてそれぞれ対応する形で解釈を試みたい。

① 自己存在としての人間に関する理解

ローティの反基礎づけ主義が示唆するのは、個人は偶然性に彩られているということである。無数の出来事が連続的、あるいは断続的にその個人をめぐる生じ、彼はそれらを言葉やイメージで定着させ、自己の歴史・物語を生成する。ただその言葉やイメージは、共同体の中で存続し繰り返されてきた物語を語る媒体、内容である。個人は共同体から言葉やイメージを借りてこなければ自己の物語を生成し得ないが、幸運にも新たに作られた個人の物語が公共の欲求を満たす場合には、共同体における自己の意味づけがなされることになるだろう。自己存在としての人間理解は、ここでは、共同体に生きる自己の創造過程を通して得られるものと考えられるかもしれない。

② 他者としての人間に関する理解

他者理解に関してローティが示してみせたのは、共同体間の相互理解という地平であろう。対話の可能性はそれぞれの共同体が構築してきた物語に求められる。それぞれの物語に対してメタフォリカルなアプローチを試みることから共同体相互の接近可能性が生まれてくるといえるだろう。

③ 人間存在の全体に関する理解

これについていえることは、人間存在の全体という基盤が人間の普遍性に求められるわけではないということである。あくまで共同体の偶然的存在性を出発点としつつ連帯を求める態度において模索されるべきであるが、しかしそれ

でもなお全体性への志向が密かに前提とされているというべきであろう。スポーツから示される人間理解も人間の普遍性に直結するものとはいえず、むしろ偶然の産物から始まって今日のようなグローバルな実践へと至ったスポーツの道程を通じて、歴史的な存在としての人間の有り様を掴まえるところに人間理解の可能性が見出されるのではなかろうか。

これまで、人間理解といえば、個別的な存在としての人間の探究、すなわちスポーツ実践へのきわめて個人的な関与による具体的、唯一的、実存的体験についての探究というレベルか、あるいはホモ・ロクエンスやホモ・ファベル、ホモ・ルーデンスと称して人類の類的本質の探究というレベルでの人間理解が主として試みられてきたように思われる。これらに対し、イーザムの論文は、その中間的な場を対象としているといえるだろう。ヘーゲルの個別、特殊、普遍のカテゴリーを援用すれば、まさに特殊の位相に焦点を当てていることになる。

スポーツをきっかけとして成立する共同体もこうした問題圏に位置づけられるだろう。たとえば本稿でも触れたプールメルカをめぐる話題は、スポーツから成り立つ共同体と宗教から成り立つ共同体との間に起こりうる問題を反映している。その鍵を握るのが、異なる共同体間での対話であることがイーザムの論文から読み取ることができたわけだが、対話のきっかけとなるイメージなどを呈示するためにはどのような物語を形成してゆくのか。それがスポーツに関わる共同体にとってこれからの課題となるであろう。近年スポーツ界を騒がせているドーピング問題は、それが選手一個人の問題ではなく、彼らを取り巻く人々や組織にも関わることを示している³¹⁾。こうした問題が起こる背景に、これまで築かれてきた「スポーツはフェアである」といった物語が人々に受け入れられなくなっている状況があるのだろう。スポーツに関わる共同体がこれからいかなる物語を構築し、他の共同体との対話を展開してゆくのか。

その具体例を記述し解釈するという実証的な研究が今後求められる研究の一つのあり方を呈示するだろう。

註および引用参考文献

- 1) このことは戦後の民主体育の思想から窺われる。たとえば弘中は、「戦後わが国は、占領軍の指導の下に、軍国主義や超国家主義の風潮をとり除き、民主主義社会、民主主義教育、民主的な体育・スポーツを建設すべく再出発したのであった。戦後の学校体育は、戦前、なかんずく戦時中の体育理念—『天皇（戦争）のための体育』から『民主主義体育』へと大きく転換した」と述べている。弘中栄子（1973）新体育の出発。前川峯雄編、戦後学校体育の研究。不昧堂、p. 58 参照。また、わが国の体育実践の中で人間の捉え方がどう変わったかについては次の文献を参照されたい。城丸章夫（1980）体育と人格形成。青木書店、pp. 160-183.
- 2) 体育原理専門分科会編（1986）スポーツの概念。不昧堂出版、p. 3.
- 3) 丸山高司（1993）表現的存在—歴史的生の存在論—。岩波講座現代思想：思想としての20世紀。岩波書店、p. 140.
- 4) 人間理解の構造については、魂と肉体の二原理による西洋の伝統的な理解にしても、あるいはまた和辻哲郎によるよく知られた人間存在の二重構造という理解にしても、確定された最終知見というものは未だ存在しないと言えるであろう。そこで、本稿ではスポーツにおける人間という特殊性という観点から、二原理あるいは二重構造よりも分節化した形での分類を試みた。
- 5) 上田閑照（1995）自己の現象学。岩波講座現代社会学2：自我・主体・アイデンティティ。岩波書店、p. 211.
- 6) 上田閑照、同上書、p. 212.
- 7) 生涯スポーツの基本的なとらえかたについてはたとえば次のような文献が参考になろう。佐伯聰夫編（1984）現代スポーツの社会学。不昧堂、森川貞夫編著（1984）生涯スポーツのすすめ。共栄出版、高嶋 實・大河内保雪（1990）生涯スポーツへの提言。不昧堂、團 琢磨・大橋美勝（1994）学校五日制と生涯スポーツ。不昧堂。
- 8) Lenk, H. (1985) *Die achte Kunst*. Interfrom: Zürich, S. 126.
- 9) 次の文献を参照されたい。石垣健二（1996）運動習得における他者理解の可能性—運動習得に

よって他者の何が理解できるのか—。体育・スポーツ哲学研究第18巻2号、pp. 25-40.

- 10) Lenk, H. (1983) *Eigenleistung*. Interfrom: Zürich, S. 106.
- 11) Lenk, H. (1982) Task of the Philosophy of Sport. Between Publicity and Anthropology. Toward a Philosophic Anthropology of the Achieving Being. Presidential Address-1981. *Journal of the Philosophy of Sport*, pp. 94-106.
- 12) レンクは次のように言う。「補償、自己運動、行為ですら未だ人間を言い表すのには決定的なものではないように思える。負担免除 (Entlastung)、補償、過剰補償などの理念は、ホモ・ファベル、ホモ・クレアートル、仕事をし想像する人間 (der werkschaffende schöpferische Mensch) という考え方と結びついて継続的にそして実り豊かに結合される」。Vgl. *Eigenleistung*. S. 35-36. そして実り豊かに結合された結果がレンクの人間理解に結びつくのである。
- 13) これ以外にも、スポーツ哲学の領域で大きな影響を持つ、たとえばポール・ワイス (Weiss, P.) による「卓越者 (an excellent men)」との人間理解の存在も指摘できるであろう。しかしながら、レンクの *Social Philosophy of Athletics* の中で社会哲学的観点の欠如と言う点からの批判を受けているように、これさえも人間存在全体に関する人間理解とは言えないであろう。Cf. Lenk (1979), *Social Philosophy of Athletics*. Stipes, Champaign.
- 14) 例えば、Arnold, P. J. (1995) Three approaches toward an understanding of sportsmanship, Morgan, W. J., Meier, K. V. (eds.) *Philosophic inquiry in sport*. 2nd ed. Human kinetics: Champaign, pp. 161-167.
- 15) 多木浩二(1995) スポーツを考える。筑摩書房。p. 9.
- 16) Eassom, S. (1997) Sport, Solidarity, and the Expanding Circle. *Journal of the Philosophy of Sport*, vol. 24 p. 88.
- 17) *ibid.*, p. 80.
- 18) 1996年アトランタオリンピック大会の時点でIOC 委員106名中女性委員は7名にすぎない。ジェニンクス, A. (野川春夫監訳) (1998) オリンピックの汚れた貴族。サイエンティスト社。pp. 42-47. 付録A 参照。
- 19) Eassom, *op. cit.*, pp. 79-98.
- 20) *ibid.*, p. 79.
- 21) シンガー, P. (山内友三郎・塚崎智監訳) (1991) 実践の倫理。昭和堂。pp. 63-67. 参照。

- 22) 渡邊二郎 (1996) 英米哲学入門. 筑摩書房.
pp. 46-47.
- 23) ローティ, R. (富田恭彦訳) (1988) 連帯と自由の哲学—二元論の幻想を超えて—. 岩波書店.
p. 23.
- 24) 同上.
- 25) Cf. Eassom, *op. cit.*, P. 84.
- 26) *ibid.*, p. 86.
- 27) *ibid.*, p. 85.
- 28) *ibid.*
- 29) *ibid.*, p. 86.
- 30) *ibid.*
- 31) Vgl. Lenk, H., Pilz, G. (1989) *Das Prinzip Fairneß*. Interfrom: Zürich.
-

受付 1999年 3 月18日

受理 1999年 8 月10日